第10回国際シーフードサミット参加記

永田　光博

NPO法人であるSeaWeb（http:www.seaweb.org）が主催して平成24年9月に開催された国際シーフードサミットに参加する機会を得たのでサミットの目的、印象に残ったセッション、香港の街並みについて簡単に紹介する。

このサミットの話は思わぬところから舞い込んできた。北見管内の秋サケ定置網漁業の水産エコラベルMSC取得に向けて、審査機関であるSCS(Scientific Certification System：アメリカ・カリフォルニア州）による現地審査が平成24年4月に札幌市と北見管内で行われた。この現地審査にアメリカで世界の野生サケの保護活動を進めている野生サケセンター（WSC：Wild Salmon Center、アメリカ・ポートランド市）からアジア担当部長のBrian Couette氏が参加した。この時に香港で開催されるシーフードサミットの話と、そこで日本のサケに関する勉強会を開催したい旨の話があった。WSCとは研究交流があり、特に野生資源の保全や管理手法に関するワークショップや国際会議に私も数回参加して情報交換を行ってきた。今回は北海道大学の帰山雅秀教授と私が参加することになった。

シーフードサミットは水産業界の生産者、加工業者、卸業者、バイヤー、小売業者、シェフ、レストラン、保護団体、政治家、研究者、メディア関係者など多くの人々が集まって、持続可能な水産物について議論し、発表し、人脈を構築するイベントで、その目的は、環境的、社会的、そして経済的に持続可能な水産物市場へと導く対話とパートナーシップを育むことである。10回目を迎えた今回の開催地には欧米ではなくアジアの香港が選ばれた。アジアは全世界の水産養殖の90%を生産し、世界の海洋と内水面漁業上位10カ国のうち日本を含む6つをアジアの国々が占めている。さらに、世界の漁業と水産養殖部門で働く人々の85%はアジアに住んでいる。そして中国は102億USドルの水産物を世界へ輸出する世界最大の輸出国でもある。そのアジアでサミットを開催することは、アジア市場において持続可能な水産物を効果的に広め、持続可能性への関与を高めることが世界の持続可能な水産物の確立に向けて大きなステップになるとSeaWebは考えている。

9月5日千歳空港からの直行便で香港に着いたのは、現地時間で午後9時前であった。入国審査を終了してタクシーに乗りサミット会場である九龍地区のKowloon Shangri La ホテルに着いたのは午後10時過ぎ(写真1)。チェックインを済ませて部屋に入り明日のスケジュールを確認し、就寝と思ったが、空腹感がおさまらない。そこでホテル近くのラーメン屋で腹ごしらえをすることにした。時間は午後11時であったが、香港の夜は休むことがない。香港の人の多さと熱気に触れたことで、20数年前に経験した上海の夜が蘇ってきた。海老入りワンタン麺を注文し、ビールを頼むと、指で隣を指している。ラーメン屋にはアルコール飲料はなく、隣のセブンイレブンで買ってきなさいという合図であった。缶ビールを飲みながら美味しいワンタン麺で遅い夕食を済ませてホテルに戻り、1日目は終わった。

写真1　サミット会場となったKowloon Shangri La ホテル

写真２　オープンセレモニーの風景（SesWeb の K.Teleki 副会長の挨拶）

９月６日は会場受付で登録を済ませセレモニーに参加した。このサミットを主催した SeaWeb の会長 D.M.Martin 氏と副会長 K.Teleki 氏の挨拶に続き（写真２）、中国農務省関係者からの祝辞もあった。また、その後中国式の獅子舞もあり、大変盛大なセレモニーとなった(写真３)。セレモニー後に各セッションに分かれた分科会が３日間、各会場で行われた。マグロやフカヒレの問題、密漁水産物の規制、水産物の安心･安全などなど話題は極めて多種多様で、特に私が興味をもったのは、WSC の Caouette 氏らが主催した「21 世紀における違法サケ漁業との戦い：最新のテクノロジーとパートナーシップ」であった。この分科会では、アメリカにおけるチョウザメの密漁対策やロシアにおける日常的な密漁対策を防ぐための最新の機器が紹介された。特に、ロシアの密漁は衝撃的であった。発表者によると、サハリン州の密漁には Domestic poaching（一般の密漁者）、Commercial fishing poaching（商業漁業者の密漁）、Fishing industrial poaching（漁業会社の密漁）の３タイプがあるとのこと。一般の密漁が起こる原因としては①組織化された釣団体が少なく、②失業率が高いため、監視側の弱体化が目立つこと、加えて③政府による広報･普及・教育の不足

写真３　香港の獅子舞

を上げていた。また、もっとも多い漁業者の密漁には、川の中に違法なウライを設置して実施する規模の大きな事例も多くみられている。その原因としては①密漁サケへの加工業者の高い需要、②クオータ（漁獲割当量）による密漁の合法化（不正申告など）、③密漁への罪意識の希薄さ、そして④監視側と密漁者の不正な関係の存在があるとのことであった。また、漁業会社による密漁については、特に定置網の設置場所の違法が目立つとの指摘があった。実際、その監視のため、衛星画像を用いた方法も採用されつつあり、これは日本よりも進んだ監視体制と感じた。しかし、ここまで徹底した対策をしなければ予防できないロシアの密漁問題の根の深さを強く感じるセッションでもあった。

私の発表は9月6日の午後6時～8時にホテル内の会場で、WSC と WWF ジャパンによる共催で「日本における持続可能な漁業の確立に関する検討会」というテーマとなった(写真 4)。最初に、主催者の山内愛子氏（ WWF ジャパン）から開催挨拶があり、さらに WSC の Caouette 氏から 北海道シロザケの MSC プロジェクトについて簡単な紹介があった。その後で、私の方から、北見管内で MSC 取得に向けて行われてきた野生サケの生物モニタリングの成果と今後の課題について紹介した。さらに、北海道大学の帰山先生からは、北海道の河川においても野生魚とふ化場魚が共存できる河川生態系の修復と保全の必要性が指摘された。また、日本国内で安心・安全な水産物を消費者へ提供している「大地を守る会」の吉田和生氏が、現状の取り組みを紹介した。意見交換会では、欧米と日本との資源管理制度の違いや野生サケの管理基準のハードルの高さもあり、制度の改善には、顧客である漁業関係者への支援制度も重要との指摘を頂いた。

サミットの合間に香港の街にでてみた。9 月の香港は、非

写真 4　サケワークショップの発表風景（北大の帰山先生）

常に暑く湿度も高く、1時間も外を歩くと下着は汗でびしょ濡れ、不快指数は相当なものであった。ホテル近くにフェリー乗り場があり、そこから香港島をみると超高層ビルが異様な風景を見せていた（写真5）。夜、香港島へ渡り、香港島の頂上ビクトリアピークに観光バスで上り、世界三大夜景の一つを見ることができたが、巨大な構造物が放つ光の立体映像は（写真6）、函館の地形が作りだす自然造形とは大きな違いであり、美しさのコントラストを感じた。

写真5　九龍地区（カウルーン）から香港島をみる

写真6　香港島の山頂（ビクトリアピーク）からの夜景

写真７　船上でのさよならパーティー（右からB.Cauoette 氏（WSC）、篠　健司氏（パタゴニア日本支社）、帰山先生、著者）

最終日の夜は、ワークショップ参加者でさよなら船上パーティーが催され、船からみる香港島と九龍地区の風景もすばらしく、友人との会話を楽しみながら、印象に残るひと時を過ごすことができた（写真７）。

以前、バンクーバーで開催されたサケ・サミットに参加したことがある。この時は、漁業者、原住民、保護団体も参加していたが、サケの管理や保全がメインテーマであったことから研究者が圧倒的に多かった。しかし、今回は、むしろ研究者は少なく、水産物を直接・間接に扱う業界関係者が多く参加しており、新たな関係を築くことができたのが一番の収穫となった。ところで、サミット後の９月中旬に日本政府による尖閣諸島の国有化に関連して大規模な抗議行動が香港でもあったことを報道で聞いた。もし、サミット中にあったとしたら、どのようなサミットになったことであろうか？

最後に、今回のサミットとワークショップへ招待していただいたWSCのB. Caouette氏に心よりお礼申し上げる。

（場長　　ながた　みつひろ　）